

令和元年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 英文学科・助手

申請者氏名 島本 慎一郎

研究課題		第二言語リーディングと他技能間における習熟度の相関関係
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>リーディングに関する研究は四段階で計画されている。                      第一段階 第二言語リーディングにおける認知処理                      第二段階 第二言語リーディングと他技能間における習熟度の相関関係                      第三段階 第二言語リーディング指導の役割と効果                      第四段階 第二言語リーディングの習熟度を測るテストに関わる研究</p> <p>第一段階では、第二言語リーディングにおける認知処理の研究を行った。具体的には、リーディングの流暢さと正確さ（理解度）との関係性に注目し、流暢さに焦点を当てることで、相関的に正確さの向上が期待できることを、リーディングの認知処理モデルを用いて説明した。今年度は、昨年度に引き続き、上記第二段階のリーディングと他技能間の習熟度の相関関係について研究を行い、両者にはどの程度相関関係があるのかを観察・調査をもとに数値化し、第三段階のリーディング指導の役割と効果についての研究の橋渡しとしたい。</p>
	研究の結果	<p>第二言語リーディングの理解度を正確に測定するために、テスト題材に使用された文法項目の理解が、どの程度、学習者の習熟度に関連し、どの程度、第二言語リーディングにおける流暢さに影響を与えるのかを調査した。使用頻度が高く、第二言語学習において、比較的、初期段階で修得するとされる“-ing”形に焦点を当てた。“-ing”形といっても、その使用のされ方は多岐にわたることから、実験観察を計画するにあたり、“-ing”そのものの文法的特性や使用のされ方を整理する必要があることから、“-ing”形の二重使用について考察を行った。結果、“-ing”形の二重使用は、単に-ingの連続が制約の原因となるものではなく、その意味機能にも要因があることが分かった。具体的には、未来指示の“-ing”形の場合、二重-ingの使用が許容されやすいことから、“-ing”形の表す意味によって、二重-ing制約が課されるかどうか揺れが出ることを観察できた。</p>
	研究の考察・反省	<p>より正確に学習者のリーディング理解度を調査するために、実験観察に使用するテキストについても精査する必要があることが研究の途中でわかった。このことにより、リーディング理解度の研究から派生をして、語法・文法研究にまで範囲が及ぶこととなった。しかしながら、第二言語としての英語学習者にとって、“-ing”形は、その用法や使用頻度の多さから、リーディングの速度に直接的に関わる可能性がある。このことを意図的に使用し、観察用テキストの作成に当たることで、リーディング理解度と流暢さの関連性をより正確に測定するツールの開発に取り組んでいきたい。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>英語語法文法学会                      be starting / beginning + Ving における-ing 形の二重使用制約について                      2019年10月19日</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>2020年8月の締切に向け、英語語法文法学会へ、上記研究発表内容を加筆・修正したものを提出予定。</p>	